“Hollywood Renaissance”におけるイエス・キリスト像の転換

関西学院大学　朴　志元

本発表では”Hollywood Renaissance”におけるイエス・キリスト像の転換について考察する。“Hollywood Renaissance”は、一般的に”New Hollywood”や日本では「アメリカン・ニューシネマ」と呼称され、1960 年代後半から 1970 年代にかけてハリウッドで製作された従来の製作形式や表現方法に依拠せず、新たな印象を与える映画作品を指す。これらの映画作品で描かれるイエスは、まさに”Renaissance”という語が表すように、「神の子」としてではなく、より人間的な面が強調して描かれており、反体制ないしは従来の道徳規範から逸脱した主人公たちにイエス・キリストが投影されているのである。

しかし、Hensley-King（2017）の先行研究にも見られるように、これらの映画作品の主人公は宗教に興味を示さないどころか、宗教を拒絶する場合もあるとされており、主人公たちに投影されるイエス・キリスト像という観点は軽視されてきた。また、前述のようにこの時期の映画作品には様々な呼称が存在し、現在でも”Hollywood Renaissance”という呼称の明確な意図が検討されていない。

本発表ではアメリカン・ニューシネマの代表的作品を 3 作品取り上げ、それらを中心に映像分析を行う。『暴力脱獄』(1967)、『カッコーの巣の上で』(1975)における主人公たちは「神の子イエス」の神聖さからはかけ離れた存在であり、極めて世俗的で人間的な人物として描かれている。どちらの映画にも共通した「刑務所」という舞台において、彼らは犯罪者としてそこに足を踏み入れ、図らずも抑圧に苦しむ周囲の人々を解放に導くのである。またヴェトナム戦争を舞台とした『地獄の黙示録』（1979）では、軍規に背くカーツと彼の殺害任務を受けたウィラードという、相対する二人の主人公が登場し、そのどちらにもイエス・キリストが投影されている。

これらの主人公に投影される新たなイエス像はイエス・キリストを再解釈しようとした当時の社会と呼応する。1960 年代から 1970 年代のアメリカにおいて、カウンター・カルチャーの担い手である若者たちは自らのルーツを人間としてのイエスである「ナザレのイエス」に求めていたのである。

最後に以上の映像分析を通して、これらの映画におけるイエス・キリスト像の転換は当時のアメリカ社会やキリスト教の動向を反映したものであったことを明らかにする。また、これまで曖昧であった”Hollywood Renaissance”という表現が、この時代の映画に特徴付けられる神の子であるイエスが人間として再生（Renaissance）するという意図を持っていることを主張する。